

「豹変」のすすめ

上 廣 哲 治

今年わが会にとって、創立七十五周年の記念すべき年に当たります。五月に予定されていた記念式典は、長びくコロナ禍によって延期を余儀なくされましたが、この大節が持つ重要な意義はいささかも変わることはありません。

実践倫理には「苦難福門」という教えがあります。誰もが避けたいと思っている苦難の中にこそ、幸福への道が開かれているという考え方です。私たちは、苦難を単に否定すべきものと捉えがちですが、そこにはより善く生きるための警告やヒントが隠されています。それらを受けとめ、生活や心のあり方を改善していくことが、幸福を追求する上で不可欠だと考えるのです。

たとえば、さまざまな身体の痛みは、できれば避けたい「苦難」のひとつですが、より大きな危険を知らせてくれる有用なシグナルでもあります。背中の痛みは、筋肉の使いすぎや不自然な姿勢への警告かもしれないし、もつと深刻な心臓や腎臓などの病の兆しかもしれません。私たちはそれによって身体の異常に気づき、原因を探ることで治療に努めることができますようになります。痛みというシグナルが

あるからこそ、健全な身体を保つことができます。

世界中の人々を危機に陥れた新型コロナウイルスのパンデミックも、私たちにさまざまな警告を発しているように思います。自然を破壊しすぎていないか、人の命より経済的な利益を優先していないか、利他の心を失っていないか、人の悪ばかりを言っていないか、差別が横行していないか、家庭は本当に心安らげる場所になっているのか……等々。それらのシグナルに気づき、謙虚に反省し、誤った道筋があればそれを正していくことは、この時代に生きる者の責務でもあります。

ここで注意しておきたいのは、「苦難」即「福門」ではないということです。苦難を福門に転じるためには、まず苦難がもたらささまざまな警告に「気づく」必要があります。そうでなければ、このコロナ禍から何も学ばなかったことになってしまいます。

賢明な皆さんはもちろん、いくつもの警告に気づいておられるでしょう。しかし、気づくだけで終わってしまい、批評家気取りでやり過ぎしては、この苦難を乗り越えることはできません。気づいたことを実践に移さなければ、福門が見えてくることはないのです。

とはいえ、苦難が与える警告には、とても自分の手に負えそうもない大きな課題も含まれます。巨大な風車に立ち向かっていくドン・キホーテのように、敵わぬ相手に真剣に向き合うのも意味のないことではありませんが、私たちが取り組むべき実践とは、もつと身近な問題にかかわることです。どんなに些細なことでもいい、日常生活の中で生じるさまざまな課題に気づき、改善していく努力を積み重ねること。それがいつか、より大きな課題の解決にもつながっていくはずです。

後年、会の足跡を振り返ったとき、「新しい歴史はあのコロナ禍の中で始まった」と言われるような

成果を挙げるには、いったい何が必要なのでしょうか。決して大袈裟なことが求められているわけではありませぬ。ただ自らを改革しようという覚悟と、そのための実践があればよいのです。しかし、現実はそのほど甘くはなさそうです。すでに出来上がっている因習や固定観念にしがみつき、そこから一歩も踏み出せずにいるケースがじつに多いからです。

ビジネス書などを読んでいると、仕事をするための環境を「コンフォートゾーン（快適領域）」「ラーニングゾーン（学習領域）」「パニックゾーン（混乱領域）」の三つに分け、それぞれの領域で人間がどれだけ成長できるかを論じているものを見かけます。

コンフォートゾーンは、慣れ親しんだ環境のため居心地がよく、ストレスや不安も少なくすむのですが、この領域に居続けると人は成長しなくなってしまう。いわば、「ぬるま湯につかっている」状態で、そこからなかなか抜け出すことができなくなるのです。そして、第三者がその環境や意識を改革しようとする、なぜわざわざ変える必要があるのかと抵抗し、拒もうとします。自分のイメージや経験にないものは認めようとせず、従来の行動パターンに固執してしまうのです。自己改革ができない人とは、このようなタイプの人のことをいいます。

一方、コンフォートゾーンを抜け出してラーニングゾーンにいる人は、未知の課題に接することが多いため、努力もしなければならぬし、ストレスを感じるようにもなります。しかし、この適度なストレスこそが人間の成長を促してくれるのです。理想を求めることで、現実との間のギャップに苦しむこともありますが、それを克服することで人間の器も大きくなっていきます。

ただし、次のパニックゾーンにまで入ってしまうと、ストレスが大きくなりすぎて心身を傷つけ、成

長どころではなくなってしまう。何ごとも「よい加減」というものがあるのです。

人は誰でも過ちを犯すもので、それは倫理の実践においても同様です。しかし、失敗を恐れて殻に閉じこもってはいけません。福門は開かれませぬ。古代中国の思想家孔子は、そのことをよく知っていて、彼の教えをまとめた『論語』には、人間の過ちについての教訓が散りばめられています。たとえば――

「過てば則ち改むるに憚ること勿かれ」（過ちがあればぐずぐずせずに改めよ）

「過ちて改めざる、是れを過ちと謂う」（過ちを犯しても改めない、これを本當の過ちという）

過ちを犯してしまうのは仕方のないことだから、それをいたずらに責めることはできない。大事なことはむしろ、自らの過ちを認め、反省し、改革していくことだということです。

過ちを推奨するわけではありませんが、つまずきを恐れて何もしないより、自らの殻を破って失敗することのほうが、どれほど自己改革につながることでしょう。間違いに気づいたら躊躇せずに改め、また次の殻を破っていけばいい。そうやって少しずつ前進していく姿勢こそが、実践には欠かせません。

同じく古代中国の『易経』の中に、「君子豹変す」という一文があります。「豹変」は、現代ではもっぱら「節操なく変わり身の早いこと」を表し、悪い意味で用いられています。本来はそれとは異なり、「善い方向に変わることを意味していたようです。すなわち、豹の毛の模様が美しく変化するように、徳を備えた者は、過ちがあればそれを正し、善い方向に自らを改めていく、という意味なのです。

すでにお気づきだと思いますが、本誌『倫風』は今月号から表紙を改め、内容も大幅にリニューアルしました。それが本来の意味での「豹変」であることを願っています。そして、皆さんが来年の式典、ひいては来る八十周年の大節を見据え、みごとに「豹変」されることを願ってやみませぬ。